

質的データ分析の基本原理と QDA ソフトウェアの可能性

佐藤 郁哉

(一橋大学教授)

質的調査をおこなう際に直面する最も深刻な問題の1つに非数値データの分析と解釈の難しさがある。実際、質的調査にもとづく論文や報告書には、その根拠や妥当性が必ずしも明らかではない、自己流の分析や解釈が見られることが稀ではない。現在、労働研究のみならず社会科学一般においては、事例研究を代表とする質的調査の再評価の作業が進んでいる。また、質的・量的調査の二分法自体を乗り越えて総合的な分析を目指す「混合研究法」が注目されている。そのような状況下にあつて、質的データの分析に厳密性が欠如しがちであるということは決して望ましい事態だとは言えない。本稿では、これらの問題に対する解決策の1つとしてQDA (Qualitative Data Analysis) ソフトウェアの活用を提案する。QDA ソフトには、質的な情報をデータベースとして効率的に運用していくことを可能にする機能が装備されている。これらの機能は、単にデータ処理の効率化や扱うことが出来る事例数の増加という意味での量的な拡大だけでなく、質的調査のあり方に対して「質的転換」をもたらし得る可能性がある。もっとも、QDA ソフトは質的データ分析における最も本質的な作業をも自動化・機械化してくれる「魔法の杖」などではない。本稿では、このような認識のもとに、質的データ分析の基本原理を明らかにした上で、QDA ソフトによって「出来ること」だけでなく、「出来ないこと」についても解説していく。

目次

I 序論

II 質的調査の魅力と落とし穴——7つのタイプの薄い記述

III 翻訳プロセスとしての質的調査

IV 質的データ分析における脱文脈化・再文脈化と定性的コーディング

V 紙媒体でおこなわれる質的データ分析

VI QDA ソフトの概要と特長

VII 質的調査の「質的転換」の可能性

VIII QDA ソフトだけでは出来ないこと——質的調査の アート&サイエンス

I 序論

1 質的調査の難しさ

質的調査法を用いて社会現象について解明していこうとする際に直面する問題の中でも最も深刻なもの1つに、質的データの扱いにくさと解釈の難しさがある。実際、質的調査では、インタビューの内容を書き起こした記録やフィールドノーツの記載内容あるいは新聞・雑誌・書籍などの文書資料など、容易に数値化できない（あるいはあえて数値化することが、ほとんど意味を持たない）さまざまな資料を主たる情報源として扱わざるを得ない場合が多い。

質問紙調査によって得られるデータや既存の統

計資料等の量的データについては、多くの場合、いわば「定石」的な解析手順が一種の規範として確立されている（ただし、量的調査の大多数がそれらの規範を遵守している、というわけでもない）。それに対して、質的データについては、分析法が標準化ないし規格化されているとは言い難い面がある。事実、質的データの分析は、調査者個人の直観や感性に委ねられ、また「無手勝流」としか言いようがない解釈も少なくない。中には、単なる思い込みに過ぎないものや、主観的な印象を書き記しただけの「読書感想文」に等しい解釈が「名人芸」としてはやされている例すらある¹⁾。

一方で、情報通信技術の急速な進歩にともなう、質的調査にとって重要な内容を含む情報それ自体は、文字通り爆発的なペースで増え続けている。これは、質的調査にとって大きな可能性を示すものであると言える。もっとも、その半面で、質的データの急増という趨勢には質的調査のあり方にとってこれまで以上の混乱を招きかねない面もある。というのも、質的調査については、もっぱら自己の主張にとって都合の良い情報だけを「つまみ食い」的に引用して済ませてしまう例が稀ではなかったからである。電子化された大量の質的情報がインターネットや各種の電子媒体等を介して入手可能になっていることによって、そのような風潮にさらに拍車がかかっていく可能性があると言えるだろう。

2 QDA ソフトウェアの可能性

本稿では、以上のような幾つかの問題に対する1つの解決策として「QDA (Qualitative Data Analysis) ソフトウェア」²⁾ (以下、「QDA ソフト」)の活用を提案する。後で解説するように、QDA ソフトには、質的な情報を一種のデータベースにまとめ上げることによって効率的かつ効果的な分析作業を進めていくことを可能にする各種の機能が備わっている。

QDA ソフト自体は、欧米圏の場合、既に1980年代中頃には、大型汎用計算機用のプログラムやパーソナル・コンピュータ向けに各種のソフトウェアが開発され広く利用されてきた (Tesch 1990; Lecompte, Preissle and Tesch 1993; Weitzman

and Miles 1995)。また現在 QDA ソフトは、欧米をはじめとする海外の主要大学や研究機関においては、IT ラボ等での利用の便が提供されている他、学生・教職員に対する低価格でのインストール・サービスも一般化している。それもあって、海外の研究者にとって MAXQDA, NVivo, Atlas.ti 等の主要な QDA ソフトの名称は、ある場合には、量的調査において使用される SPSS や STATA などに匹敵するくらいに馴染みのあるものになっている。

欧米におけるこのような状況と比較して、日本の状況は著しく立ち後れている。これは1つには、QDA ソフトがもともと欧米系の、いわゆる1バイト言語（アルファベットや数字などのいわゆる半角文字）を前提として作成されていたこともあり、日本語のような2バイト系の言語（主要な文字の表記について2バイトを要する言語）については対応が不十分だったことによる。この状況は、2005年前後から主要なソフトがユニコード（文字コードの国際規格）対応となり日本語の処理が容易になったことによって徐々に変化が見られるようになっていった。

実際、過去10年ほどのあいだには、日本でも QDA ソフトを応用した分析法を扱った論文や解説書あるいはその翻訳書が刊行されるようになってきた（たとえば、佐藤 2006, 2008a, 2008b; 大谷 2006, 2014; バゼレー 近刊）。しかし、日本では現在でもなお、QDA ソフトを活用したすぐれた研究事例が、同種のソフトウェアの本格的な普及の契機となるに足るだけの「クリティカル・マス」を形成しているとは言い難い。また、QDA ソフトや大学や研究機関単位でのプログラム・ライセンス等の導入実態も、欧米等に比較すればきわめて低いレベルにとどまっている。

近年、質的研究法についての再評価の動きが進み、また質的・量的調査の二分法を越えた統合的なアプローチを目指す「混合研究法」(Bryman 2006; クレスウェル=クラーク 2010 等参照) が注目を浴びているなかで、質的データ分析それ自体の質（クオリティ）を高めていくことは急務であると言える。実際、本稿の後半で見ていくように、QDA ソフトは、質的データの処理に要する作業

を大幅に効率化し、また質的調査のあり方に対して「質的転換」をもたらしていくツールとしての可能性を秘めているのである。

3 QDA ソフト利用上の留意点と本稿の構成

もっとも、ここであらかじめ強調しておきたいのは、QDA ソフトは、質的データ分析における最も本質的な部分までも自動化してくれるわけではない、という点である。実際、各種の QDA ソフトに盛り込まれている多彩な機能に目を奪われていると、一見、それらのソフトが、質的調査における最も困難な部分までも含めて機械化してくれる「魔法の杖」のように思えてしまうことがある。しかし、それは単なる幻想に過ぎない。したがって、我々は、この種の QDA ソフトに対しては、新しい解析手法を盛り込んだ統計パッケージが登場する度に抱かれてきたような過大な期待を持つべきではないのである。

そのような点を念頭において、本稿では、かなり遠回りになってしまうが、最初に質的調査の本質的特徴とデータ分析の基本原則について解説する。その上で、QDA ソフトがデータ分析の質の向上という点で「出来ること」だけではなく、「出来ないこと」についても明確にしていく。なお、「質的データ」という場合には、通常、文字や画像、動画、音声、楽曲など実にさまざまな種類の情報が含まれる。本稿では、このうち、質的調査における分析にとって特に重要な意味を持つ文字テキストが主体のデータを中心にして見ていくことにする³⁾。

本稿では、まず、質的調査の魅力と質的データにもとづく論文や報告書に頻繁に見られる欠陥について、「7つのタイプの薄い記述」という観点から解説する(Ⅱ)。ついで、それらの欠陥の背景にある問題と、質的データ分析が一種の翻訳作業として持つ本質的な特徴との関連を明らかにする(Ⅲ)。本稿の後半では、この翻訳作業をよりシステムティックな形でおこなう際の基本的な手続きについて、その根幹をなす、定性的コーディング・脱文脈化・再文脈化の3つの続きを中心にして解説した上で(Ⅳ)、それらの作業を紙のカードを用いて実施する際の作業の概要について見て

いく(Ⅴ)。続いて、QDA ソフトがそのカード方式のデータ分析が抱える問題点をどのような形で解決し(Ⅵ)、また、それがひいては質的調査の「質的転換」をもたらすものであるか、という点について解説する(Ⅶ)。最後に、QDA ソフトだけでは対応し得ない質的データの分析における最も本質的な手続きについて、これを調査研究における「アート」的な要素が深く関わる作業としてとらえていく(Ⅷ)。

Ⅱ 質的調査の魅力と落とし穴——7つのタイプの薄い記述

1 質的調査の魅力

すぐれた質的調査の魅力は、何と言っても、その記述の迫真性と内容の豊かさであろう。これは、数値データの分析が中心となる量的調査の場合とはきわめて対照的である。古くから量的調査のメリットとして指摘されてきたように、たしかに数値化された情報は、社会現象に関する精確な記述と分析にとっては欠かせないものである。もっともその一方で、数値データを中心とする分析は、ともすれば無味乾燥なものになりがちである。実際、量的調査の分析結果には、調査対象について「高度5万フィートから俯瞰」(クスマノ2012:435)して解釈を下しているような印象があり、何とも言えないもどかしさを感じる場合が少なくない⁴⁾。

それに対して、詳細な事例研究を代表とする質的調査にもとづく報告書や論文は、読者に対して一種の「現場感覚」や「手触り感」を与えることが少なくない。たとえば、かつて著者が本誌でレビューをおこなった、労働現場に関する本格的な民族誌的研究の例に見るように(佐藤2002)、すぐれた質的研究の報告書や論文は、第一級の小説やドキュメンタリーにも匹敵する迫真のリアリティを持って読者に訴えかけてくる場合が少なくない(van Maanen 1998; 金井他2010等参照)。

2 7つのタイプの「薄い記述」

もっとも、以上のような「質的調査ならではの」

とも言える魅力や特長とされるものは、時として、ある種の質的調査に特有の欠陥と裏腹の関係にあった。たとえば、文学表現を思わせるような技巧を凝らした文章によって論理的な詰め甘さやデータの裏付けに乏しい論証不足が覆い隠されてしまうことがある。また、なぜ論文で提示された資料だけで著者が主張する結論が導かれるのかが一向に明らかにされていないケースも多い。

その種の欠陥を抱えた質的調査に見られる問題の多くは、以下に示す「7つのタイプの薄い記述」として整理してみることが出来る（佐藤 2008a: 5-11）。

- ①読書感想文型——主観的な印象や感想を中心とする、私的エッセイに近い報告書や論文
- ②ご都合主義的引用型——自分の主張にとって都合のよい証言の断片を恣意的に引用した記述が中心のもの
- ③キーワード偏重型——何らかのキーワード的な用語ないし概念を中心にした平板な記述の報告書や論文
- ④要因関連図型——複数の要因間の関係を示すモデルらしきものが提示されているのだが、その確実な根拠となる資料やデータがほとんど示されていないもの
- ⑤ディテール偏重型——ディテールに関する記述は豊富だが、全体を貫く明確なストーリーが欠如している報告書や論文
- ⑥引用過多型——「生」の資料に近いものを十分な解説を加えずに延々と引用したもの
- ⑦自己主張型——著者の体験談や主観的体験が前面に出過ぎており、肝心の研究対象の姿が見えてこない報告書や論文

以上のような問題を含む報告書や論文が作成されてしまうことの背景の1つに、「質的データ」（インタビュー記録、文書資料、現場観察記録等）を持つ基本的な性格がある。つまり、数値中心の「ハードデータ」とは対照的に、文字や画像あるいは音声などが中心の質的データについては、解釈の幅がかなり広がってしまう場合が多いのである。実際、質的調査にたずさわる者にとっては、くどのようにすれば非数値データにもとづいて妥

当性と信頼性の高い分析をおこなうことが出来るか」という点が、きわめて重要かつ深刻な問題になる場合が多い。

Ⅲ 翻訳プロセスとしての質的調査

以上のような質的データ分析の難しさと、「文化の翻訳」にまつわる特有の難しさとのあいだには密接な関係がある。「文化の翻訳」という喩えは、通常、異国でおこなわれるフィールドワークの作業が持つ基本的な性格を示す際に用いられる。もっとも、異文化の地でおこなわれるフィールドワークの場合に限らず、ほとんどあらゆるタイプの質的調査には、少なくとも次の2つの点で一種の翻訳作業としての性格がある——①重層的な文脈の解明、②現場の言葉と理論の言葉のあいだの往復。米国の人類学者クリフォード・ギアツが提唱した、「分厚い記述」と「経験近接的概念」という2つのアイディアは、これら2つの点において翻訳作業としての性格を持つ質的調査の本質の特徴について理解する上で重要なカギを提供している。

1 重層的な文脈の解明

本稿で用いている薄い記述（thin description）は、「分厚い記述（thick description）」の対義語である。比較的よく知られているように、「分厚い記述」というのは、もともとギアツが、すぐれた民族誌的記述の特徴を端的に言い表したものである（Geertz 1973）。彼によれば、民族誌的記述においては、社会的状況や出来事を、観察者が見たまま聞いたままの姿として表面的に記録するだけでなく、その奥に幾重にも折り重なった文脈をと きほぐしていく作業がきわめて重要になるのだという。というのも、そのような作業を通してはじめて行為の「意味」を明らかにし、またその解釈を書きとめていくことが出来るようになるからである。

言うまでもなく、これは単に人類学的フィールドワークの場合に限らず、質的調査一般が目指す究極の目標でもある。

たとえば、インタビュー調査で得られた特定の

発言の意図や意味について理解しようとする際には、単にその「語り」に含まれる個々の言葉の辞書的な定義を参照するだけでは決して十分ではない。それ以外にも、たとえば、そのインタビューという相互作用場面を持つ社会的な性格を念頭に置き、また、話し手が示すジェスチャーや表情などの非言語的行動、あるいはまた、調査対象者（話し手）が他の場面において示した言動などを考慮に入れた上で、その発言や証言の意味を読み取っていかねばならない。さらには、その対象者と関係の深い人々の言動、あるいはそれらの人々が属している集団や組織が置かれている状況という社会的文脈の情報と突き合わせてみることによって初めて、その発言の本当の意味や「真意」について推測できる場合が少なくない。

つまり、質的調査の場合には、言葉の表面的な意味内容だけでなく、「言外の意味」を読み込んだり、「場の空気（雰囲気）」を読み取っていったりする作業が必要になるのである。

そして、その種の作業と外国語のテキストを翻訳していく作業とのあいだには多くの共通点がある。実際、特定の文章を他の言語に翻訳していく際には、単に単語レベルの置き換えをおこなうだけでは十分ではない。それに加えて、その文章を含むテキスト全体の構成やそのテキストが置かれている社会的・時代的文脈における位置づけを踏まえた上で翻訳作業をおこなわなければならないのである。

2 日常的な言葉から抽象的な用語への置き換え

相互に入り組んだ重層的な文脈を解きほぐしながら、人々の言動に含まれている意味を解明していくことそれ自体は、調査研究に限らず我々が日常生活においてもごく当然のようにおこなっている行為でもある。その典型的な例の1つに、上でもふれた「場の空気を読む」という行為がある。

もっとも当然のことながら、質的調査の場合には、日常生活の場合とくらべてはるかに意識的・意図的かつシステムティックな形で、社会生活や人々の言動を取り巻く文脈を読み取り、またそれを正確かつ詳細な記録として書き留めていかねばならない (Sanjek 1990; Emerson, Fretz and

Shaw 2011 参照)。それに加えて、調査研究では、単に人々の言動の意味を現場の文脈を踏まえて読み取ってだけでなく、それを一定の分析フレームを踏まえた上で抽象的な概念に置き換えていくことが不可欠の作業となる。

たとえば、職業経歴を主要な研究テーマとするインタビュー調査の場合には、単に調査対象となった人々の証言をその言葉どおりに書き起こし、それを記録として残すだけでは十分ではない。そのようなテーマのもとにおこなわれる調査では、通常、それらの証言を抽象的な概念を示す用語（たとえば、職業的社会的化、キャリア・アンカー、弱い紐帯・強い紐帯等）に置き換えた上で解釈・分析していく。このような場合には、調査対象となる人々が用いている日常的な用語を一定の理論体系の用語に置き換えていくという意味で、一種の翻訳作業をおこなっていることになる。

3 経験近接的概念（現場の言葉）と経験遠隔的概念（理論の言葉）の相互翻訳

上述したような意味での翻訳作業の性格について理解する上では、「分厚い記述」と同じように、ギアツが、ある精神分析学者の言葉を借りて提案したアイディアとして広く知られる「経験近接的概念 対 経験遠隔的概念」という区分が重要な手がかりとなる (Geertz 1983 : 57-58)。

ギアツの言う「経験近接的概念 (experience-near concept)」は、調査対象となる人々（就労者、患者、地域住民等）が日常生活で見たり、感じたり、考えたりした内容をその人々自身の言葉で表現する際に使用する用語や概念を指す。一方、「経験遠隔的概念 (experience-distant concept)」は、調査者や分析者が何らかの理論的枠組みを踏まえて使用する概念やそれに対応する用語を指す。もう少し分かりやすく言い換えれば、一方を「現場の言葉」、他方を「理論の言葉」と名づけることができるだろう⁵⁾。たとえば、「キャリア展望（職業選択における）の根っこの部分」や「拠り所」は経験近接的な概念ないし現場の言葉としての性格が強い。一方、「キャリア・アンカー」は、より経験遠隔的な概念ないし理論の言葉としての性格を持っていると言える。

どのようなタイプの調査であっても、それが調査研究としての性格を持つようになるためには、調査対象となる人々の意味世界を構成する現場の言葉を、研究者コミュニティの意味世界における理論の言葉に移し替えていく作業が非常に重要な意味を持つことになる。それによって、他の事例や出来事とのより厳密な比較が可能になるだけでなく、個別具体的な出来事や事例の理解を越えて一般的なパターンや法則性を割り出していくことが出来るようになる。

もっとも、単に現場の言葉を理論の言葉へと移し替えていくだけでは、現実の社会生活から遊離した空理空論に終わってしまう可能性がある。質的調査においては、その一方で、理論的な解釈の妥当性について、調査現場で得られた資料に適宜立ち帰って確認していくプロセスが不可欠の作業となる。その点でも、質的調査と翻訳のあいだには重要な共通点があると言える。実際、すぐれた翻訳者や通訳になるためには、2つの言語のあいだを自在に行き来する能力が必要となる。それと同じように、質的調査をおこなう者が目指すべき究極の理想像は、現場の言葉と理論の言葉両方の言語を往復することが出来る「バイリンガル」的な存在なのである。

その点からすれば、先に挙げた7つのタイプの「薄い記述」は、いずれの場合も、どちらか一方の意味世界に偏ることによって、結果として、一種の「誤訳」ないし「悪訳」になってしまった例であると言える。たとえば、読書感想文型・ディテール偏重型・引用過多型の3タイプの場合は、現場の言葉に密着し過ぎることによって抽象化・概念化が不十分になってしまっている。一方、ご都合主義的引用型・キーワード偏重型・要因関連図型は、抽象的な概念用語をいわば「天下り式」に質的データに対して適用しているだけに過ぎない場合が多い。つまり、この場合は、理論の言葉を現場の意味世界に対して強引に押しつけているのである（自己主張型は、どちらの意味世界に対しても無頓着な、独りよがりの解釈ということになる）。

全ての人がすぐれた二言語使用者（バイリンガル）になれるわけではないように、この現場の言葉と理論の言葉の往復というのは、決して容易な

わざではない。実際、現場の意味世界のリアリティを生かしながら、それを抽象的な理論の言葉に置き換えていく作業をおこなうためには、一定期間のトレーニングと実際のデータ分析の体験の積み重ねを踏まえた地道な努力が不可欠となる。そして、その作業の重要なカギとなるのが、次節で解説する「定性的（質的）コーディング（qualitative coding）」などと呼ばれる手続きである⁶⁾。この定性的コーディングは、紙のカード等を使った伝統的な分析法の場合にせよ、あるいはQDAソフトを利用する場合にせよ、質的データの根幹をなす作業であると言える。

IV 質的データ分析における脱文脈化・再文脈化と定性的コーディング⁷⁾

1 翻訳と質的データ分析の違い

以上で見てきたように、質的データの分析と外国語テキストの翻訳作業とのあいだには多くの共通点がある。もっともその一方で、翻訳のプロセスと質的分析の手順とのあいだには決定的な違いもある。つまり、翻訳の場合には、通常、ある言語で書かれたテキストを、ほぼ丸ごと別の言語のテキストに置き換えていく。それに対して、質的データ分析の際には、複数の資料から特定の部分を取り出して、それを報告書や論文の形に再構成していく場合が多いのである。

たとえば、質的調査では、上で例としてとりあげたインタビュー記録だけでなく、フィールドノーツの記録や新聞・雑誌等の記事あるいは社史の記載内容など実に多様な種類の文字資料から特定の部分——「文書セグメント」あるいは単に「セグメント」と呼ばれる——を抜き出して、それを報告書や論文という新しい文脈のなかに組み込んでいく、という作業がよくおこなわれる。その意味では、質的研究におけるデータの分析には、異なる言語世界・意味世界のあいだを橋渡ししていく一種の翻訳という側面に加えて、「再編集」の作業としての一面があるのだと言えよう。

先に挙げた「薄い記述」では、いずれの場合も、その再編集の作業がきわめて恣意的におこなわれ

ることになる。たとえば、ご都合主義的引用型の場合には、自説にとって都合の良い断片だけを「つまみ食い」のようにして取り上げて論文の中に引用していくことになる。それに対して、よりシステマティックな質的調査を目指す場合には、「定性的コーディング」の発想にもとづくデータ分析法が採用される場合が多い。これは、文書セグメントに対して、その内容を端的に示す「小見出し」のような語句や短文を付けていく手続きを指す。たとえば、職業キャリアに関するインタビューの記録のうちの数行に転職を決意した経緯に関する証言が見られたとしたら、その部分に対して「転職経緯」という語句をコードとして割り振るような手続きなどがこれにあたる。

2 定性的コーディングと定量的コーディング

よく知られているように、社会調査で「コーディング」という場合、通常は、質問紙サーベイ等の量的調査で採用される手続きを指す。たとえば、個々の設問に対する回答に対して特定の数値を割り当てていくことによって、いわゆる「データ縮約 (data reduction)」をはかる作業などが、その典型である (定量的コーディングと定性的コーディングの違いについて詳しくは、Richards (2005: 95-86) および佐藤 (2008a: 38-41) 参照)。この「定量的コーディング」の手続きと同じように、定性的コーディングの場合も、一面では、膨大な量のデータを、語句や短文形式のコードを中心とする情報という、比較的取扱が容易な量にまで圧縮していくための作業としての性格がある⁸⁾。

もっとも一方で、定量的コーディングと定性的コーディングの場合には、大きな違いもある。つまり、定量的コーディングは一方的かつ一度限りのものであることが多いのに対して、定性的コーディングでは、何度となくコーディングの見直しが繰り返される可能性があるのである。実際、質問紙調査などでは、いったん「回答→数値コード」という手順で数値に置き換えたものを、もう一度元の回答の形に復元するようなことは減多におこなわれない。それに対して定性的コーディングでは、コードを割り当てた特定の文書セグメントあるいは文書テキスト全体の文脈に何度となく

立ち帰って改めて分析をおこなう場合が少なくな

い。たとえば、「転職経緯」というコードを割り当てた、複数の対象者についての記録の文書セグメントを相互に比較することによって、そのコードが適切なものであるか否かという点について確認してみることがある。場合によっては、そのような比較対照の作業を経てコードの名称を変更していくこともある。また、「転職経緯」というコードと他のコード (「処遇への不満」「ヘッドハンティング」等) との関係について、セグメントの内容や原文の文脈を改めて参照しながら、仮説や理論的枠組みそれ自体を練り直していくようなこともおこなわれる。質的データ分析の醍醐味の1つは、このような一連の作業を通して、いわばボトムアップ的な形で、「仮説生成」ないし「理論発見」をおこなっていくところにあると言える。

3 脱文脈化と再文脈化

質的データ分析に関する幾つかの解説書では、以上のような手続きを経て、全体の文書を、セグメントを基本的な単位として小分けにしていく作業のことを「脱文脈化 (de-contextualization)」と呼ぶ。一方、そのようにして切り分けられた文書セグメントを新たな報告書や論文の形に組み立てていく一連のプロセスについては、これを「再文脈化 (re-contextualization)」と呼ぶ (Tesch 1990; 佐藤 2008a, 2008b)⁹⁾。

この脱文脈化と再文脈化の手続きというのは、取りも直さず、調査対象者の意味世界の特定部分をそのオリジナルの文脈から切り離した上で、それを抽象的な理論概念から構成されるアカデミックな意味世界の文脈の中に再配置していく作業に他ならない。また、質的調査においては、そのようにしていったん理論の言葉の意味世界に移し替えられた現場の言葉を、もう一度現場の言葉に再翻訳して検討し直すこともよくおこなわれる。

V 紙媒体でおこなわれる質的データ分析

1 紙のカードによる分析

先に指摘したように、日本では、QDA ソフトがそれほど普及していない。したがって、以上のような、「定性的コーディング」「脱文脈化」「再文脈化」などは、一般には耳慣れない用語であると思われる。特に、質的調査についてあまりなじみが無い場合には、以上のようなデータ分析法の持つ意義は、近年になって、質的調査法の持つ価値が再評価され、また QDA ソフトの使用が一般的になってきたことによって初めて明確に認識されてきたものであるようにも思われるかも知れない。

しかし実際には、前節までで解説してきた質的データ分析の発想や基本的な手続きそれ自体は、QDA ソフトはおろかワードプロセッサやデータベースソフトが一般に普及するはるか以前から採用されてきたものである¹⁰⁾。

たとえば、質的研究に従事してきた人々は師匠や先輩から次のように言われることがよくあった——「インタビュー記録やフィールドノーツは、同じものを3部作っておくように」。3部のうち1部は、万一の場合に備えてとっておく保存用の原本である。もう1部は、常に手もとに置いて何度も読み返して全体の文脈について確認するためのコピーである。そして、最後の1部が紙形式のデータベースを作る原材料になる。つまり、原本をコピーした数百ページ（時にはそれ以上）の帳面は、特定の文書セグメントを単位にしてハサミやカッターで切り離して（脱文脈化）紙の形のデータベースを構築し、さらに報告書という新しい文脈に編集していく（再文脈化）ための基本的な素材になるのである。

このような紙ベースのデータベースによる質的データ分析法は、欧米では、少なくとも1930年代前後から、インデックスカードや紙片を利用したものが知られてきた（Blau [1955] 1963: 273; Faris 1970: 19）。日本でも、1960年代後半からは、紙のカードを使った、いわゆる KJ 法（川喜田

1967）や「知的生産の技術」（梅棹1969）などの名称で、欧米と同様の発想にもとづく分析法が広く知られるようになっていった。そして、これらの方法を採用する場合には、グラウンデッド・セオリー・アプローチ（本特集の他章参照）と同じように、基本的にはボトムアップ的に分析の枠組みを立ち上げていくことが1つの狙いになっていた。

以上のようなカードを使った分析法は、収集した資料の量がまだそれほど多くない段階で試行的な概念モデルを作ってみる際などには有効な方法である。また、カード方式は、はじめて質的データ分析をおこなうような場合に、脱文脈化や再文脈化という作業の要点について、手作業を通して体験的に理解していく上でもきわめて効果的である。

2 カード方式の問題点

もっとも、その一方で、このような紙媒体のデータベースには、幾つかの問題もある。

第一にあげられる問題は、紙のカードの場合、データベースを構築する際に膨大な手間と時間がかかることが多い、という点である。実際、いわゆる「スクラップブック」の例を思い浮かべて見れば分かるように、新聞や雑誌の記事にせよあるいはフィールドノーツや聞きとり記録にせよ、それをコピーしたり、ハサミとノリを使ってカード上に切り貼りしたりする作業には相当の手間と時間がかかる。

また、データがある一定量を越えると、カードの収納スペースや管理といった点でも深刻な問題が生じてくる。特に上の例で見たように、特定の文書セグメントについて、複数コードを組み合わせることによって多様な角度から検討していきたい場合には、この収納スペースと管理の問題は深刻なものになってくる。というのも、それぞれのコードごとに異なるカードの束を作る必要が出てくるからである。

このような媒体管理上の問題点は、必要な情報を含むカードを探し出す際の効率性やスピードに関わる問題とも密接な関連を持っている。カード式データベースは、ほんらい「生^{なま}データの山」の

混沌を整理することによって、情報検索と情報抽出を容易にするために構築したはずのものである。しかし、分析が次第に高度で込み入ったものになっていくにつれて、今度はそれ自身が「カードの山」と化してしまい、情報の検索と抽出のスピードを鈍らせてしまうのである。

さらに、カード方式は、定型サイズの制約という点でも問題がある。紙のカードを質的研究における情報処理に使う場合には、B6判のインデックスカード——いわゆる「京大式カード」——などを使うことが多い。このようなサイズのカードに情報を転写する作業が持つ本来の目的の1つは、定型サイズに加工することで情報の並べ替えやシャッフルなどの操作を容易にすることにある。しかし、これは他方では、本来その大きさには納まりきらないはずの情報を一定サイズの紙の中に無理に押し込むことにもなりかねない。実際、B6サイズでは、たとえば少し長めの文書セグメントを貼り付けたい時などには複数枚のカードを使用しなければならないことも多いが、この場合は、シャッフルしたり分類したりする際の取りまわしが厄介になりがちである。

最後に、カード方式では、そのカードに盛り込んだ情報について、それが埋め込まれていたオリジナルの資料の文脈を参照しながら分析していこうとする際にも時間と手間がかかるという点が重大な問題になることも多い。本来カードにテキストを転写する際には、その出所情報（たとえば、インタビュー記録のページや行の番号）を記載するのが基本であるが、その情報を元にしてオリジナルの資料を参照したいと思った時には、いちいち原資料のある場所（書庫、資料室、本棚等）に戻って作業をおこなわなければならない。

VI QDA ソフトの概要と特長

1 QDA ソフトの基本的な構成

QDA ソフトを代表とする質的データ分析用の専用ソフトウェアの多くは、上で解説した紙のカードを用いた分析手順をかなり忠実に電子的な方式に移し替えたものと考えてよい。

図1には、そのQDAソフトの概要を、代表的なソフトの1つであるMAXQDA（マックス・キューディーエー）の例をとりあげて示しておいた（図は、最新版のMAXQDA12のものである¹¹⁾。

なお、この画面の作例の原データとして使用したのは、いわゆる「団塊の世代」に属する青森県下北半島出身者数百名がたどってきた、職業経歴や家庭生活などの変遷を中心とする生活史の軌跡を追った「下北再訪：平成13年53歳の面接記録——『金の卵』から『シルバーエッグ（銀の卵）』」（細江2002）のインタビュー記録である。引用にあたっては、個人情報保護の観点もあって、原著者の了承を得て原文に対して相当程度の変更を加えてある（地区名、人名は全て仮名である）。

このソフトウェアの場合に限らず多くのQDAソフトには、最低限次のような4つの機能に対応するウィンドウがある（下の番号は、図中の番号に対応している）。

- ①文書データセットの管理
- ②文書データに対する編集およびコーディング
- ③コード同士の関係に対応した分析モデルの構築
- ④特定のコードに対応するカードの検索・抽出

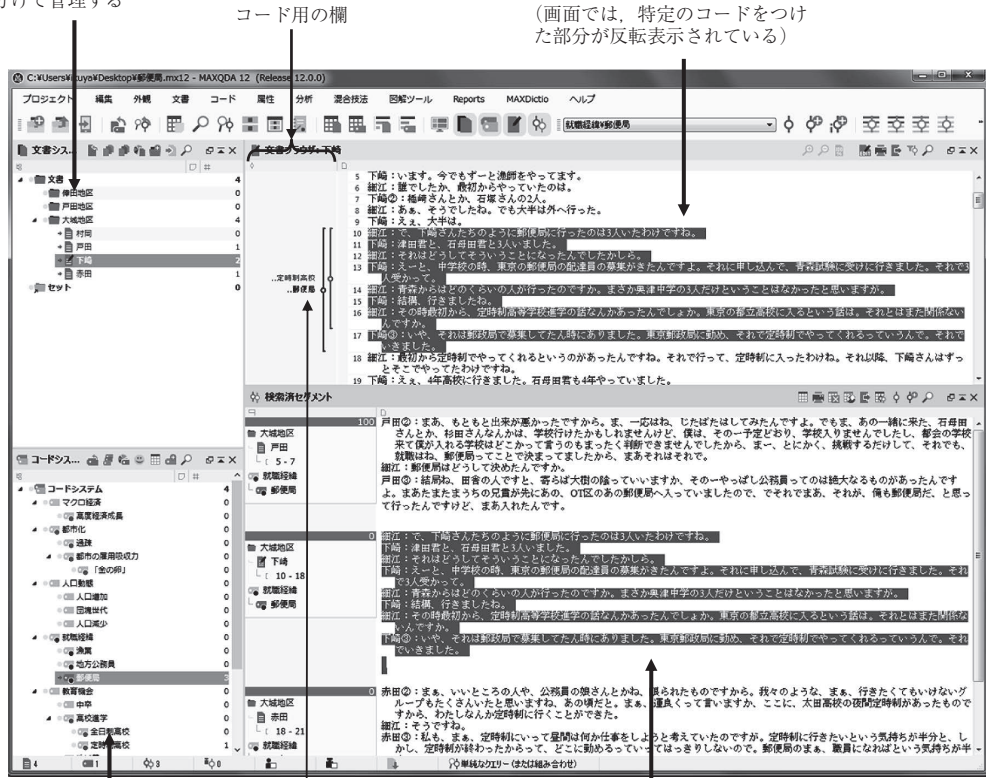
文書データセットの管理というのは、文字通り、電子化された文字テキストのデータを幾つかのグループに分類して整理しておくための機能である。これは、紙媒体の資料で言えば、資料の種類や性格別にそれぞれ専用の箱に入れておいたりバインダーに綴じたりして収納する手順に該当する。

このようにして整理された文書を1件ずつとり出してその内容をじっくりと読みこみながら、その特定部分をカードのように切り抜いたり、その切り抜いた断片に対してコードを割り当てたりしていく作業の際に重要になるのが、2番目のウィンドウに割り当てられた機能である。そのコード自体は、3番目のウィンドウで概念モデルや概念モデルを構築していく際の基本的な構成要素になる。この概念モデルは、この例のように「ツリー構造」などと呼ばれる階層構造の形式をとること

図1 MAXQDA12の画面構成

①文書システム：文書ファイルをいくつかのグループに分けて管理する

②文書ブラウザ：個々の文書を表示して編集したりコードを割り振っていく（画面では、特定のコードをつけた部分が反転表示されている）



コード用の欄

③コードシステム：コード同士の関係をツリー構造の形で表示して、概念モデルを作成する

コードの例（色別表示も可能）

④検索済セグメント：特定のコードがついている文書セグメントを集めて表示する（この例では、3カ所）

が多いが、これによって、書物の目次が〈部→章→節→項→目→……〉という階層的な構成をとると同じように、複数の項目同士の関係を階層的な関係として目に見えるような形にしながら整理していけるようになる。

そして、紙のカードの場合にカードを「似たもの集め」の要領でグループ分けしていくのと同様の手順で、同じ項目見出しが付けられた文書の断片を集めて一覧しながらアイデアをまとめていく際に使用するのが4番目の機能である。

2 分析事例（作例）から

図1の作例で言えば、この図では、「大崎地区」と名づけられた文書のグループ（ウィンドウ①）に含まれる3件のインタビュー記録が分析対象となっている。ウィンドウ②には、大崎地区の文書

グループの中でも「下崎」という名前の対象者のインタビュー記録が表示されている。そして、ウィンドウ④には、その下崎氏を含めて、1960年代初め（昭和30年代後半）に中学校卒業を経て郵便局へ就職することになった3名（下崎、戸田、赤田の3氏）に対するインタビューの記録の中で、特に、就職の経緯について述べた3個のセグメントが示されている。

このウィンドウ④に表示された3個のセグメントを相互に比較することによって、3名の対象者が郵便局員としての職を得た経緯に見られる共通点と相違点について検討していくことが可能になる。

たとえば、これら3つのセグメントの内容やインタビュー記録の前後の文脈からは、当時は公務員としての郵便局員が同地域では特に有利な職種

として広く認知されていたことが、共通の就職動機であったことが読み取れる。一方で、3名のあいだには就職先の選択の直接的なきっかけに関する違いも幾つか見られる。たとえば、下崎氏の場合には、氏の長兄がやはり郵便局員として地元で職を得ていたことが主要な動機であったとされている。一方、戸田氏と赤田氏は、東京での採用ということが2人にとって大きな魅力になっていたとしている。

先に述べたように、このような文書セグメント同士の比較によるデータ分析それ自体は、紙のカード等を利用した質的データ分析でも頻繁におこなわれており、その手続きの根本にある発想自体は、QDA ソフトでも特にかわることはない。もっとも、コンピュータ・ソフトの利用によって、これらの作業を格段に効率化することが可能になる。

たとえば MAXQDA では、ウィンドウ④にこのような表示をおこなう際の手続きは、きわめて単純なものである。つまり、図2に示した、さまざまなコードを階層的なツリー構造の形式で表示した「コードシステム」(ウィンドウ③)で「就職経緯」のコードの下位にある「郵便局」(反転表示されている)を指定した上で、マウスを使った簡単な操作によって各種のメニューを呼び出して検索機能を選択すればよい¹²⁾。また、同ソフトについては、図3に示したように、コード間の関係について図解で表現するためのオプションも提供されている。

なお、ここでは、QDA ソフトを使用した分析作業のエッセンスを示すために、3名のみの例を示している。すぐ後でも指摘するように、カード方式と比べた場合の QDA ソフトの長所の1つには、扱うべきデータが大量になった場合の取り回

図2 MAXQDA12におけるコードシステム



図3 コード間の関係の図解表現

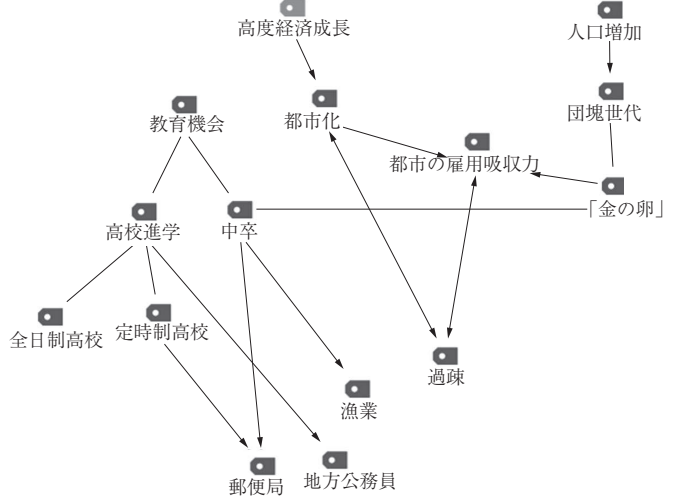


表1 カード方式 対 QDA ソフト

カード方式		QDA ソフト
データベース構築の手間と時間	膨大な手間と時間	比較的容易で短時間の処理が可能
データ収納のスペースと管理	スペース大・管理が困難	スペース小・管理が容易
情報検索・抽出の効率性	非効率性	効率性
原文脈の参照	困難	比較的容易

しの容易さが挙げられる。実際、分析すべきインタビュー記録が3件から30件ないし300件に増えたとしても、基本的には、上で述べたのと同様の単純な操作によって、該当するセグメント群を一瞬のうちに呼び出して一覧的に表示することが出来るのである。

3 カード方式 対 QDA ソフト

表1は、上で分析事例を取り上げて触れた点も含めて、前節で解説したカード方式の質的データ分析法とQDAソフトの特徴とを改めて比較してみたものである。

この表に見るように、QDAソフトでは、紙媒体によるデータ処理に含まれる問題のうちのかんりのものを解決することが出来る。

たとえば、紙のカードと違って電子化されたカードの収納スペースは、きわめて小さなものである。また、フィールドノートやインタビュー記録が電子化されていれば、特定の文章や語句（文字列）を瞬時に探し当てることも出来る。同じように、QDAソフトに組み込まれているカット＆ペースト機能は、ノリとハサミを使っていたカードの複製作業を時間的にも労力という点でも数十分の一の程度のものにしてくれる。

また、QDAソフトの場合には、もともとのインタビュー記録などの文書テキストのファイルから切り離され（脱文脈化され）てデータベースの中に取り込まれたセグメント（図1では④の画面）と、オリジナルの文書ファイル（②の画面）とが電子的にリンクされている。したがって、必要に応じて、特定のセグメントの原文脈における位置づけを瞬時に検索・確認することが出来る。さらに、QDAソフトには、文字テキストの分析作業の中で浮かんできたさまざまな理論的なアイディアを即座に文章としてまとめた上で、それを図解

表示したり印刷したりするための機能なども盛り込まれている。

このように、QDAソフトを使えば、分析作業の大幅な効率化をはかることが出来る。特に、扱わなければならない文書データの量がかなり大きくなっている場合には、QDAソフト無しではシステムティックな分析をおこなうことはほとんど不可能であるとさえ言える。

VII 質的調査の「質的転換」の可能性

QDAソフトの特長に関する以上の解説では、主としてデータ処理に関わる作業の効率性を中心にして見てきた。もっとも、QDAソフトが質的データ分析において果たしうる役割は、それにとどまるものではない。実際には、QDAソフトは、次の2点において質的調査のあり方に対して「質的転換」をもたらす可能性を秘めているのである——①記述と分析における「広さと深さのトレードオフ」の解消、②データ収集とデータ分析の有機的連携。

1 広さと深さのトレードオフの解消

質的調査については、よく、「個々の事例に関する分析のレベルは深いかも知れないが、狭い範囲の対象しかカバーできない」というようなことが言われる。たとえば、詳細な事例研究では、扱うことが出来る対象の数はどうしても少なくなってしまう。したがって、その少数の事例で得られた知見がどれだけの一般性を持つか、という点については疑問が残る場合が多い。これは、質問表調査などの量的調査に特有の、「広いけれども浅くなりがち分析」とは対照的な特徴である。つまり、統計的調査では、多数のサンプル（ひいては母集団）に見られる全体的な傾向について推測

することは出来るのだが、その一方で個々の対象に関する分析はどうしても浅いものになりがちである。これがひいては、本稿の冒頭にあげた「高度5万フィートから俯瞰」しているような印象にもつながってくるのである。

このように、それぞれの調査技法を用いた記述や分析の深さと広さととのあいだにトレードオフの関係があることが多い。

そして、質的調査に関して言えば、本稿の前半で解説した質的データの扱いにくさが、記述と分析における「広さ」に関する限界の重要な背景としてある場合が多い。実際、重層的な文脈を考慮に入れた上での翻訳作業が要求される場合には、どうしても、調査対象として扱える事例の数は限られてくる。それに加えて、Vで解説した、紙媒体でのデータ処理の非効率性は、その「広さを犠牲にした深さ」という問題をより深刻なものにしていく可能性がある。

QDAソフトによる質的データ分析法は、質的調査にとってのいわば宿命とも言えるこの問題に対して1つの解決の道を示している。実際、もし質的調査の多くが単一ないしごく少数の事例研究にとどまってきた主な理由がデータ処理上の技術的な問題にあるとするならば、QDAソフトを活用することによってそれを大幅に改善していく可能性が出てくる。つまり、QDAソフトの活用は、「深くて狭い」少数事例研究が抱える制約を越えて「深くて広い」比較事例研究の可能性が広がっていく可能性があるのである。

さらにもう1点、QDAソフトを使うことによって、個々の事例についての分析をより深いものにしていくことが可能になるという点も忘れてはならないだろう。というのも、QDAソフトによる分析作業の効率化は、Vで解説した定性的コーディング・脱文脈化・再文脈化という一連の手続きをよりシステムティックにおこなう道を開くものだからである。これによって、たとえそれぞれの事例に関するデータの総量が増えたとしても、それを「つまみ食い」的ではなく、丹念に分析していく道が開けていくのである。

2 データ収集とデータ分析の有機的連携

QDAソフトは、記述と分析における狭さだけでなく、質的調査につきものの、データ収集とデータ分析の作業のあいだのタイムラグという問題を解決する手段にもなりうる。

ここで、タイムラグというのは、データ分析がともすれば「後回し」になってしまいがちな傾向を指す。これは1つには、データの収集作業に相当程度の時間と手間がかかることによる。たとえば、インタビュー調査の場合で言えば、聞き取った内容についてメモを元にして書きとめたり、録音記録から書き起こしたりするには、聞き取りそれ自体に要した時間の数倍の時間がかかることが多い。同様の点は、現場で観察した内容を数十ページにもおよぶフィールドノートにまとめる作業についても指摘できる。また、インタビューにせよ現場観察にせよ、調査対象となる人々や組織あるいは集団と実際にコンタクトできる機会や時間が限定されているために、データを収集する際には、もっぱらその作業にかかりきりにならざるを得ないことも多い。

そのような事情もあって、質的調査では、得られたデータを分析する作業は、どうしてもデータ収集作業が一段落した後の時期ということになってしまいがちである。そのようなタイムラグがある場合には、実際に出来事を観察したり発言を聞き取ったりした際のフレッシュな感覚や印象があらかた失われてしまった段階で分析をおこなってしまうことにもなる。また、その分析には、後知恵的な事後解釈が加わってしまうことも稀ではない。そして、紙のカードを使って分析をおこなっていると、このような、データ収集とデータ分析の作業のあいだに生じがちなタイムラグは、さらに拡大してしまうことになりかねない。

それに対して、QDAソフトの活用によって分析作業の効率の大幅な改善が望める場合には、そのタイムラグをかなりの程度縮めることが出来るようになる。また、電子化した情報の場合には収納スペースという点で大きな利点があることも、データの収集と分析という2つの作業のあいだに有機的な連携を構築していく上で効果的である。

これは特に、フィールドワークのような、現場に身を置いて調査をおこなう際のように、使用出来る作業スペースが限定される場合には大きなメリットになる。

質的調査においてデータ分析を出来るだけ前倒しにすることの利点は、かなり以前から指摘されてきた (Emerson, Fretz and Shaw 2011 : x-xi)。実際、それによって、データを収集しながらほぼリアルタイムでそれを分析し、さらにその分析結果を次の段階のデータ収集に生かす、というようなやり方で調査を進めていくことが出来るようになる¹³⁾。QDA ソフトは、そのような柔軟かつダイナミックなやり方で調査を実際に進めていく上で大きな可能性を秘めているのである。

VIII QDA ソフトだけでは出来ないこと ——質的調査のアート&サイエンス

1 QDA ソフトの可能性と限界

以上で見てきたように、QDA ソフトは、分析作業のスピードアップや扱える対象事例の増加という意味での、いわば量的な面での効率化だけではなく、分析の広さと深さ、そしてまたデータの収集と分析の有機的連携という点において、質的調査にとっての「質的転換」をもたらす可能性を秘めている。もっとも、ここで1つ注意しておかなければならないことがある。それは、QDA ソフトは質的データ分析が抱える全ての問題をたちどころに解決してくれる「魔法の杖」などではない、ということである。

実際、QDA ソフトは、たとえば、次のような問いに関わる思考プロセスをも自動化してくれるわけではない——「インタビュー記録におけるこの文書セグメントは、他の部分の発言との関係においてどのような位置づけにあるか」「ある現象について理解したり説明したりしていく上で最も重要なコード (概念的カテゴリー) はどのようなものか」「複数のコード間には、どのような関連があるか」。当然のことながら、これらの問いに対する答えは、分析者が、自分自身の頭を使って見つけ出していかなければならない¹⁴⁾。そのた

めには、これまでと同じようにフィールドノートや聞き取り記録を何度も読み返すという、時間がかかる地道な作業は、どうしても欠かすことが出来ない。

つまり、QDA ソフトというのは、決して、質的データ分析における最も本質的な手続きである、重層的な文脈の解明および現場の言葉と理論の言葉の往復という2つの作業それ自体を自動化してくれるプログラムなどではないのである。QDA ソフトは、むしろ、それらの手続きの効率化を支援することによって、より効果的な分析を可能にするところに特長があるのだと言える。

QDA ソフトが抱えるこのような面での制約や限界について理解する上で示唆に富むのは、自動翻訳ソフトが抱えている限界である。よく知られているように、現在の技術水準の機械翻訳では、少しでも長文になると、かなり珍妙な訳文しか提示されない。特に非定型的な文章あるいは断片的な文章になると、ほとんど意味をなさない不条理な文章しか出てこないことが多い。これは、翻訳ソフトによって自動化されるのは、基本的には語単位ないし文単位での置き換えというルーチ的な部分であるからに他ならない。

それに対して、専門の翻訳家がたとえば外国語の作品の翻訳をおこなう場合には、単語や文章という単位だけでなく、少なくとも次にあげるようなさまざまなレベルの文脈を考慮に入れていかなければならない——特定の文章が埋め込まれている前後の文章の脈絡、段落を単位にした文脈、段落と段落の関係、特定の段落が含まれる節あるいは章の関係、書物全体レベルでの文脈 (全体のプロット、テーマ、文体等)。

2 「アート」としての質的データ分析

言うまでもなく、まともな翻訳をおこなおうとする際に考慮に入れる必要がある文脈は、上にあげたものだけにとどまらない。たとえば、小説などの文芸作品を翻訳する場合には、その作者の作品群というコンテキスト、あるいは時代背景や執筆時の文芸ジャンルの状況なども考慮に入れた上で最もふさわしいと思われる訳語や訳文を選定していく必要がある。そして、現実にプロの翻訳家

がおこなっている、このような重層的な文脈を解きほぐしていく作業は、翻訳という作業を構成する「アート」の部分であると言える。

同様の点は、質的調査についても指摘できる。すなわち、重層的な文脈の解明と現場の言葉と理論の言葉の往復あるいはそれらのプロセスを踏まえた脱文脈化・再文脈化の作業は、質的調査の全プロセスの中でも、どうしても機械任せにすることが出来ない「アート」として要素を多分に含む部分なのである。よく知られているように、あらゆるタイプの調査研究には、サイエンスとしての側面だけでなく、感性や直観あるいはひらめきという要素が重要な意味を持つ「アート」としての側面がある（佐藤 2015a：3章，8章）。本稿の冒頭でも述べたことから明らかなように、このアートとしての側面は質的データの読み取りの作業においては必須の要件であると言える。

もしかしたら遠い将来には、人口知能技術の大幅な進歩によって、感性や直観が要求されるそのような部分までも含めて QDA ソフトが代行してくれるような時代が到来するかも知れない。しかし、少なくとも現在の技術水準では、「文化の翻訳」における最も本質的な部分を機械化ないし自動化が出来るはずはないのである。

その意味で、我々は、QDA ソフトに対して過剰な期待を持つべきではないのだと言える。この点については、これまでさまざまな多変量解析（因子分析，数量化理論，共分散構造分析等）のルーチン的な作業を自動化してくれる解析プログラムが登場した際に、それらに対して寄せられていた過大な期待と実際の結末について思い起こして見る必要があるだろう。それぞれの解析プログラムは、たしかに、いずれも社会現象を解明していく上で大きな可能性を秘めている。しかし、それらのソフトウェアは複雑な社会現象の成り立ちを手品のようにたちどころに解明してくれる魔法の杖などではなかったのである。

QDA ソフトについても、同様の点が指摘できる。つまり、QDA ソフトには、質的データ分析におけるルーチン的な作業を自動化することによって、分析におけるアートの要素を側面から支援する機能が装備されている。しかし、それは

決してそのアートの要素が関わる作業を分析者に代わって行うものでないのである。

- 1) この点については、佐藤 (2015b：13章) 参照。
- 2) CAQDAS (Computer Assisted Qualitative Data Analysis Software) とも言う。
- 3) この点については、Kuckartz (2014：2) 参照。
- 4) これについては、たとえば、クスマノ (2012：435) およびミンツバーグ (2011：272-279) 参照。
- 5) ギャツが指摘するように、両者の区別は相対的なものである。実際、現場の言葉、理論の言葉という用語自体が、調査をおこなう者たちにとっての「調査現場」の実感に近い意味合いを持っていると言えるだろう。
- 6) 量的調査の場合にも、qualitative coding という用語を使用する例がある。もっとも、この場合は、内容分析の際や自由回答欄の記述のデータ処理の際に文字テキストの内容を幾つかのカテゴリーに分類して、名義尺度である数値コードを割り当てる際の作業（つまり、「質的変数」への変換作業）を指す用語としての使用が想定されている。これは明らかに、本稿で解説している定性的コーディングとは性格の異なる作業である。この点については、佐藤 (2008a：53-58) 参照。また、質的調査における定性的コーディングは Glaser and Strauss (1967：ch.5) によって初めて明確に定式化されたものである。
- 7) 以下、本稿の解説のかかなりの部分は、佐藤 (2008) の第4章および9章の内容を下敷きしている。
- 8) もっとも定性的コーディングの場合には、単に情報量を圧縮するというよりは、むしろコーディングを通してデータ同士の関係をより豊かなものにしていく data enrichment ないし data retention というべき側面もある。これについては、Tesch (1990：138-139) および Richards (2005：86) 参照。
- 9) 紙幅の制約からここでは解説を省略しているが、実際には、再文脈化の手続きは、脱文脈化したセグメントを分類・配列して相互の関係を明確にしていく「データベース化」と、それらのセグメントを論文や報告書の文脈に配置していく「ストーリー化」という2つの手続きに分けて考えることが出来る。これについて詳しくは、佐藤 (2008a：4章；2008b：2章) 参照。
- 10) 定性的コーディングの比較的確かな定式化は少なくとも Glaser and Strauss (1967：ch.5) にまで遡ることが出来る。
- 11) 過去のバージョンに対応するものになってしまうが、MAXQDAについては、次のウェブサイトと比較的詳細な使用方法を掲載しておいた——http://www.shin-yo-sha.co.jp/sato_data.htm。また、MAXQDA, NVivo, Atlas.tiについては、それぞれ期間限定の無料体験版が次のサイトで提供されている——<http://www.maxqda.com/downloads/demo>, <http://www.nvivo.jp/?gclid=CKSOv4LCPMUCFVgIvQodfwEA1Q>, <http://atlasti.com/free-trial-version/>
- 12) 作例であるために、コードシステムはかなり単純なものになっている。言うまでもなく、実際の分析においては、コード体系はかなり複雑なものになることが多いだろう。
- 13) 著者は、そのような研究方法を「漸次構造化アプローチ」と呼んでいる。これについては、佐藤 (2015a：4章) 参照。
- 14) 実際、そこまで自動化できるのならば、多くの調査者は失業してしまうか、あるいは機械がおこなう作業の一部を請け負うだけの存在になってしまうに違いない。

参考文献

- 梅棹忠夫 (1969) 『知的生産の技術』岩波新書.
- 大谷順子 (2006) 『事例研究の革新的方法——阪神大震災被災高齢者の五年と高齢化社会の未来像』九州大学出版会.
- (2014) 「質的アプローチを用いた研究手法——健康教育分野への適用」『日本健康教育学会誌』No.22(2), pp.177-184.
- 金井壽宏・佐藤郁哉・クンダ, ギデオ・ヴァン・マーネン, ジョン (2010) 『組織エスノグラフィー』有斐閣.
- 川喜田二郎 (1967) 『発想法』中公新書.
- クスマノ, マイケル (2012) 『君臨する企業の「6つの法則」』(鬼澤忍訳) 日本経済新聞出版社.
- クレスウェル, ジョン・クラーク, ヴィッキ (大谷順子訳) (2010) 『人間科学のための混合研究法』北大路書房.
- 佐藤郁哉 (2002) 「労働現場の民族誌」『日本労働研究雑誌』No.500, pp.56-71.
- 佐藤郁哉 (2006) 『定性データ分析入門——QDA ソフトウェア・マニュアル』新曜社.
- (2008a) 『質的データ分析法——原理・方法・実践』新曜社.
- (2008b) 『QDA ソフトを活用する実践質的データ分析入門』新曜社.
- (2015a) 『社会調査の考え方 (上)』東京大学出版会.
- (2015b) 『社会調査の考え方 (下)』東京大学出版会.
- バゼレー, パット (木村裕三他訳) (近刊 [2015 刊行予定]) 『NVivo による質的データ分析 (仮題)』新曜社.
- 細江達郎 (2002) 「下北再訪:平成13年53歳の面接記録——『金の卵』から『シルバーエッグ (銀の卵)』」『岩手フィールドワークモノグラフ』No.4, 14-32, 岩手県立大学岩田フィールドワーク研究会.
- ミンツバーク, ヘンリー (池村千秋訳) (2011) 『マネジャーの実像——「管理職」はなぜ仕事に追われているのか』日経BP.
- Blau, Peter. ([1955] 1963) *The Dynamics of Bureaucracy*, Chicago, IL: University of Chicago Press.
- Bryman, Alan ed. (2006) *Mixed Methods* Vol. I ~ IV, Los Angeles, CA: SAGE Publications.
- Emerson, Robert, Rachel Fretz, and Linda Shaw (2011) *Writing Ethnographic Fieldnotes* (2nd ed.). University of Chicago Press (佐藤郁哉・好井裕明・山田富秋 (1998) 『方法としてのフィールドノート』新曜社 [第1版の訳]).
- Faris, Robert (1970) *Chicago Sociology, 1920-1932*, Chicago, IL: University of Chicago Press.
- Geertz, Clifford (1973) *The Interpretation of Cultures*, New York, NY: Basic Books (吉田禎吾・柳川啓一・中牧弘允・板橋作美訳 (1987) 『文化の解釈学 I, II』岩波書店).
- (1983) *Local Knowledge*, New York, NY: Basic Books.
- Glaser, Barney and Anselm Strauss (1967) *The Discovery of Grounded Theory*, Chicago, IL: Aldine.
- Kuckartz, Udo (2014) *Qualitative Text Analysis*, Los Angeles, CA: SAGE Publications.
- Lecompte, Margaret, Judith Preissle, and Renata Tesch (1993) *Ethnography and Qualitative Design in Educational Research*, San Diego, CA: Academic Press.
- Richards, Lyn (2005) *Handling Qualitative Data*, Los Angeles, CA: SAGE Publications (大谷順子訳 (2009) 『質的データの取り扱い』北大路書房).
- Sanjek, Roger ed. (1990) *Fieldnotes*, Ithaca, NY: Cornell University Press.
- Tesch, Renata (1990) *Qualitative Research*, New York, NY: Falmer Press.
- van Maanen, John ed. (1998) *Qualitative Studies of Organizations*, Thousand Oaks, CA: SAGE Publications.
- Weitzman, Eben and Matthew Miles (1995) *Computer Programs for Qualitative Data Analysis*, Thousand Oaks, CA: SAGE Publications.

さとう・いくや 一橋大学商学研究科教授。主な著作に『社会調査の考え方 (上)(下)』(東京大学出版会, 2015年)。組織社会学・社会調査論専攻。